

研 究

父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連

—妊娠期から生後4か月までの縦断的研究—

小山 里織¹⁾, 森山 雅子²⁾, 小林佐知子³⁾
長谷川有香⁴⁾, 丸山笑里佳⁵⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、乳児をもつ父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連を検討することである。第1子を出産予定の夫婦62組を対象に、妊娠後期、生後1か月、2か月、4か月において sensitivity と育児行動を調べた。その結果、以下のことが明らかとなった。(a) 父親の育児行動は、子どもの月齢に応じて回数が増えるものと減るものがある。(b) sensitivity は、父親よりも母親の方が高く、母親は生後数か月の間に子どもの月齢にともない発達するが、父親においては短期間で発達しない。(c) sensitivity が上昇した少人数の父親の特徴は、他の父親よりも授乳や着替えの回数が多いことである。これらの結果から、父親の sensitivity は子どもと関わる時間の量と関連することの可能性が示された。

Key words : 父親, 育児行動, sensitivity

I. 問題と目的

sensitivity とは、肯定的で乳児の感情や生理的な状態を制御するのを助け、乳児の合図の微妙な差異を読み取り、正確で相応しい反応、子どもの発達の興味や能力の理解のことであり、養育行動の代表的な指標として用いられてきた。例えば、母親の sensitivity と子どもの愛着の関連について検討した研究において、子どもの信号に対する母親の sensitivity が、養育行動の中でも子どものアタッチメント行動に対して影響力を持つ最も重要な側面であると指摘されている¹⁾。母親の sensitivity は日々の子どもの関わりを通して発達することが知られている²⁾。母親の発

達を父親に適用すると、父親も発達する存在であると考え。父親の sensitivity も母親と同様に発達するのか。発達するとすれば何によるものなのか。本研究の目的は、父親と母親の sensitivity の発達と育児行動との関連を検討することである。

近年、父親を対象とした研究は増えつつあり、父親の育児参加の必要性に関心が集まっている。例えば、子どもの発達に父親の子どもとの関わりが影響していることを指摘するもの^{3~7)}、夫婦関係や妻の精神的健康に対する父親の育児関与の必要性を指摘するもの^{8~11)}、さらには父親自身の発達や育児関与の意味について検討するものなど^{12,13)}、複数の観点から父親の育児行動が取り上げられるようになってきた。

The Relationship between Sensitivity Development and Child-Care Behavior :

[2555]

A Longitudinal Study from Pregnant Period to 4 Months of Age

受付 13. 9. 2

Saori KOYAMA, Masako MORIYAMA, Sachiko KOBAYASHI, Yuka HASEGAWA, Erika MARUYAMA

採用 14. 8.16

1) 県立広島大学助産学専攻科 (助産師 / 研究職)

2) 愛知江南短期大学現代幼児学科 (研究職)

3) 大垣女子短期大学総合教育センター(臨床心理士 / 研究職)

4) 中京大学心理学部 (研究職)

5) 岡崎女子短期大学 (臨床心理士 / 研究職)

別刷請求先: 小山里織 県立広島大学助産学専攻科 〒723-0053 広島県三原市学園町1-1

Tel : 0848-60-1120 Fax : 0848-60-1179

しかし、これらの先行研究の多くは母親の感じ方や捉え方によるもので、父親自身が回答したものではなかったり、父親を対象とした研究においても、どの程度育児に参加しているか認識をたずねるもので、行動回数を示したものは見当たらない。その理由として、育児の主たる担い手が母親であることや、父親からデータを収集することの難しさが影響していると推測される。さらに、これまでの父親研究の多くは幼児期を対象としていることから、乳児期からの育児行動については曖昧であり、出産後早期における父親の育児行動の実態は未知な部分が多いといえる。父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連について詳細に検討するためには、父親の日々の育児行動について、極めて早期から正確に捉える必要があると考える。そこで本研究では、生後1～4か月に焦点を当て、母親が普段行っている育児行動の中から主要な10項目について、父親と母親が一日何回実施しているのか実態を明らかにする。

加えて、父親の育児経験によって出産後の育児行動に違いがみられるかについても検討する。妊娠期は親としての準備期であることが、母親の発達を扱う研究において指摘されてきた¹⁴⁾。近年、女性だけでなく男性にとっても妊娠期が親としての準備期であると考えられ、父親への教育的配慮が重視されている。パパママ教室の開催、沐浴や抱き方などの体験学習の場が積極的に提供されるようになったことは、その代表的なものといえる。母親からの聞き取り調査によると、出産準備教室に参加している父親の割合は40%近くに及ぶという¹⁵⁾。このような教室は、育児が学習を通して習熟する、つまり回数を重ねることで上達するという理論をもとに、父親が妊娠期に体験学習することで出産後の育児がスムーズになることを目的に実施されている。育児が学習を通して習熟するとすれば、育児を経験している父親と未経験の父親とでは、育児経験のある父親の方が出産後の育児が習熟しており育児行動の回数も多くなることが予測される。

以上のことから、本研究では第一に乳児をもつ父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の変化を明らかにし、両者の関連を検討する。そして、第二に父親の育児経験と出産後の育児行動の関連について検討することを目的とする。

II. 方 法

1. 調査対象者および調査時期

第1子を出産予定の夫婦62組を対象に、2008年7月～2009年6月の期間調査を実施した。そのうち妊娠後期、生後1か月、2か月、4か月のすべての時期のデータが収集できたのは25組、2か月と4か月の観察データが収集できたのは31組であった。そのため、25組の夫婦を分析対象とし、ビデオデータの分析のみ31組の夫婦を分析対象とした。対象者の年齢は妊娠後期 (range30～38週) の時点で、父親32.04歳 (range25～50歳, SD =5.02), 母親30.16歳 (range21～35歳, SD =3.35) であった。その他の対象者の属性は表1のとおりである。

2. 調査手続

A 県内の3保健センターで開催されるパパママ教室で調査依頼をした。調査依頼の際、研究目的、調査内容、プライバシーの保護、研究協力は任意であるこ

表1 対象者の属性 n = 25

家族形態	n	(%)		
核家族	22	(88.0)		
拡大家族	2	(8.0)		
不明	1	(4.0)		
職種	父親		母親	
	n	(%)	n	(%)
専門的・技術的職業	8	(32.0)	3	(12.0)
管理的職業	0	(0.0)	1	(4.0)
事務的職業	6	(24.0)	3	(12.0)
サービス・販売職業	1	(4.0)	1	(4.0)
技能的・労務的職業	7	(28.0)	0	(0.0)
保安職業	1	(4.0)	0	(0.0)
農林漁業以外の自営業	2	(8.0)	0	(0.0)
その他	0	(0.0)	1	(4.0)
就労状況			妊娠中	1～4か月
	n	(%)	n	(%)
就業 (フルタイム)	25	(100.0)	8	(32.0)
就業 (パートタイム)	0	(0.0)	0	(0.0)
専業主婦または主夫	0	(0.0)	16	(64.0)
その他(育児休暇など)	0	(0.0)	1	(4.0)
父親と子どもの同居	n	(%)		
1か月	12	(48.0)		
2か月	24	(96.0)		
4か月	25	(100.0)		

(注) 就業する母親9人のうち1人は出産後退職していた。

表2 各調査期における質問紙内容

妊娠期	1 か月, 2 か月, 4 か月
年齢	就労状況
家族形態	現在の同居者
職種	育児行動
就労状況	
育児経験	

とを口頭・書面にて説明し、同意が得られた夫婦62組に対して、妊娠期、生後1か月、2か月、4か月に郵送法にて質問紙の配布・回収を行った。各調査期における質問紙内容を表2に示した。さらに、2か月と4か月において家庭で親子遊び（観察用のおもちゃを用いてのあやしと自由遊び）をしているシーンを父親と母親それぞれ各3分間、ビデオ観察してもらった。父親の在宅中に調査者による撮影が困難なケースが多いことや、より自然なスタイルでの撮影をするために、質問紙と共にビデオ録画用テープ、ビデオ撮影の手順（親子の表情が写る角度で撮影すること、配置図など）を郵送し、対象者に撮影を依頼した。家庭にビデオカメラがない場合には、ビデオカメラを貸し出した。

3. 調査内容

i. 育児行動

「抱く」、「寝かしつけ」、「入浴（沐浴）」、「授乳」、「げっぷ」、「おむつ（尿）交換」、「おむつ（便）交換」、「着替え」、「遊び」、「お守り」の10項目について、平日、休日それぞれ一日の実施回数をたずねた。

ii. sensitivity

Emotional Availability Scale¹⁶⁾の中のsensitivity尺度（9段階）を用いた。この尺度の特徴は、具体的な行動よりも行動スタイルを強調する点であり、包括的で親が反応的であることだけに重点を置いていない点である。概念の要素は、ポジティブな感情、明確な理解と適切な反応、親子のやりとりの間のタイミングの気付き、注意と行動においての柔軟性、親子間の遊びの多様性と創造性、子どもの受け取り方、相互作用の量と子どもにとって親が利用可能であること、葛藤状況における解決方法である。父親と母親それぞれが親子遊び（観察用のおもちゃを用いてのあやしと自由遊び）をしているシーンについて、これらの要素を総合的に判断し評定する。評定基準は、「9非常にsensitive」、「7全般的にsensitive」、「5一致しないsensitive」、「3いくらかinsensitive」、「1非常に

insensitive」で、「8」、「6」、「4」、「2」の評定は、いくつかの例の行動スタイルを参考に、前述の評定基準にプラスあるいは、マイナスしていく。ランダムに選択した6カップル12ケースについて、筆者以外の心理学者研究者1名が評定した。評定が一致した率は.88であり、1段階以上の評定のズレは協議のうえで決定した。

iii. 育児経験

「抱く」、「入浴（沐浴）」、「授乳」、「おむつ（尿）交換」、「おむつ（便）交換」、「着替え」、「遊び」、「お守り」の8項目について、妊娠期を含めてこれまでに「3回以上したことがある」、「1～2回したことがある」、「全くしたことがない」の3件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結 果

1. 父親と母親の育児行動の変化

図1と図2は、1か月、2か月、4か月における父親と母親の一日における育児行動（10項目）の平均回数を示したものである。平日と休日を合算して一日の平均回数を算出した。10項目の育児行動について一要因の分散分析を行い、その結果、有意であった項目についてBonferroni法による多重比較を行った。父親の育児行動の中で子どもの月齢にともない回数が有意

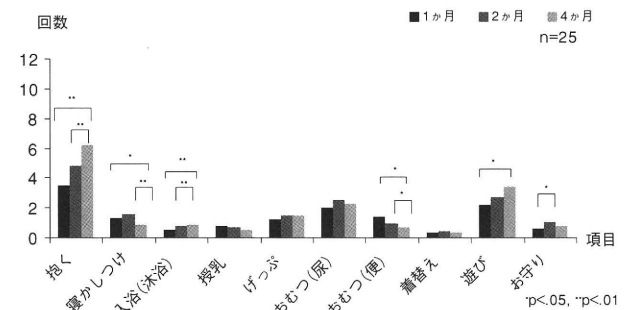


図1 一日における父親の育児行動の平均回数

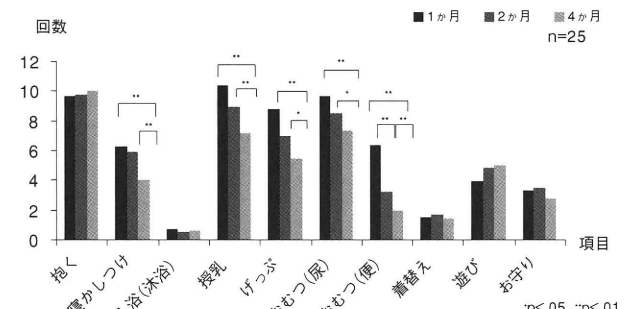


図2 一日における母親の育児行動の平均回数

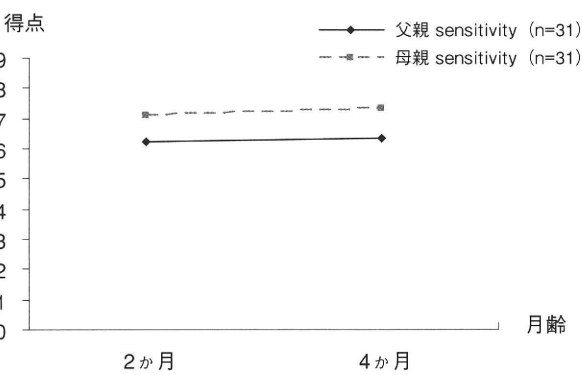


図3 2か月と4か月における父親と母親の sensitivity 得点

に増加した項目は、「抱く」($F(2,48) = 5.47, p < .01$), 「入浴 (沐浴)」($F(2,48) = 12.50, p < .01$), 「遊び」($F(2,48) = 4.15, p < .05$), 「お守り」($F(2,48) = 3.51, p < .05$) であり, 有意に減少した項目は「寝かしつけ」($F(2,48) = 6.79, p < .01$), 「おむつ (便) 交換」($F(2,48) = 5.29, p < .05$) であった。一方, 母親の育児行動においては, 有意に上昇した項目はなく, 「寝かしつけ」($F(2,48) = 6.09, p < .01$), 「授乳」($F(2,48) = 8.06, p < .01$), 「げっぷ」($F(2,48) = 7.10, p < .01$), 「おむつ (尿) 交換」($F(2,48) = 7.04, p < .01$), 「おむつ (便) 交換」($F(2,48) = 37.60, p < .01$) の回数が子どもの月齢にともない有意に減少していた。

2. 父親と母親の sensitivity の発達

2か月と4か月における父親と母親の sensitivity の平均値を示したものが図3である。親(2)×時期(2)の二要因の分散分析の結果, 親と時期との有意な交互作用が認められた ($F(1,30) = 3.15, p < .01$)。単純

主効果の検定 (LSD 法) を行ったところ, 時期では母親において2か月より4か月の方が得点は高く ($F(1,30) = 12.9, p < .01$), 親では両時期とも母親が父親より得点が高いことが示された (2か月: $F(1,30) = 30.7, p < .01$; 4か月: $F(1,30) = 71.0, p < .01$)。さらに, 2か月と4か月各期の父親と母親の sensitivity の関連について検討したところ, 2か月では有意な相関は認められず, 4か月において有意な正相関が認められた ($r = .48, p < .01$)。

3. 父親の sensitivity の発達と育児行動の関連

ここまでの結果から父親の sensitivity は, 生後4か月間では母親の sensitivity のような発達をみせないことが示された。しかし, 父親たちの中には2~4か月にかけて sensitivity 得点が増加しているものもあり, 得点の変化には個人差がみられた。そこで, sensitivity 得点が2~4か月にかけて上昇した群と変化しなかった群に分け, 2か月と4か月における育児行動の回数に違いがあるか検討した。図4は父親の2か月と4か月における上昇群と変化なし群の一日の育児行動の平均回数を示したものである。群(2)×時期(2)の二要因の分散分析を行ったところ, すべての育児行動について有意な交互作用は認められなかった。Bonferroni 法による主効果の検定を行った結果, 群の主効果が認められたのは, 「授乳」($F(1,22) = 6.12, p < .05$) と「着替え」($F(1,22) = 8.81, p < .05$) であり, いずれも上昇群の方が変化なし群より平均回数が多かった。時期の主効果が有意あるいは有意傾向であったのは「寝かしつけ」($F(1,22) = 16.51, p < .01$), 「おむつ (便) 交換」($F(1,22) = 3.12, p < .10$), 「遊び」($F(1,22) = 3.12, p < .10$), 「お守り」($F(1,22) = 3.12, p < .10$) であり, 2か月と4か月を比べると, 2か月の方が平均回数が多い項目は「抱く」, 「入浴 (沐浴)」, 「おむつ (尿) 交換」, 「おむつ (便) 交換」, 「着替え」, 「遊び」, 「お守り」であり, 4か月の方が平均回数が多い項目は「寝かしつけ」, 「授乳」, 「げっぷ」, 「おむつ (尿) 交換」, 「おむつ (便) 交換」, 「着替え」, 「遊び」, 「お守り」であった。

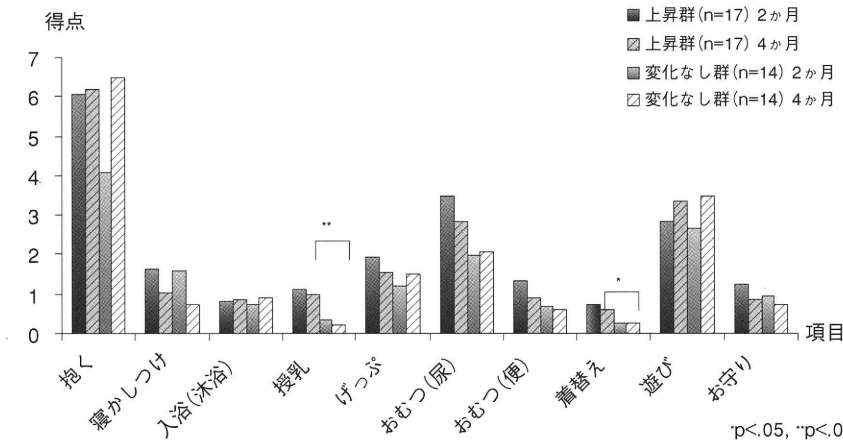


図4 父親の2か月と4か月における「上昇群」と「変化なし群」の育児行動の平均回数

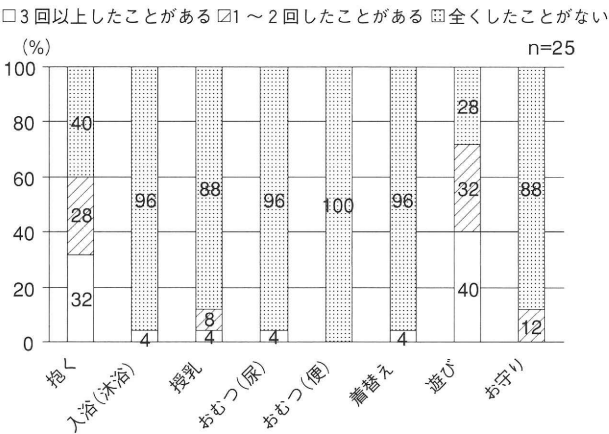


図5 父親の育児経験

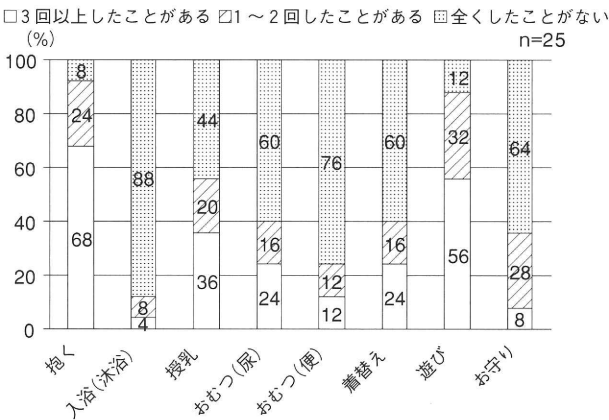


図6 母親の育児経験

表3 父親の抱き「経験群」と「未経験群」の生後1か月における一日の育児行動の平均回数

	n	抱く	寝かしつけ	入浴（沐浴）	授乳	げっぷ	おむつ（尿）	おむつ（便）	着替え	遊び	お守り
経験群	15	3.27 (1.46)	1.33 (1.46)	0.53 (0.35)	0.87 (1.79)	1.53 (1.85)	1.87 (1.88)	1.37 (1.77)	0.30 (0.32)	2.10 (1.72)	0.67 (1.05)
未経験群	10	3.90 (4.23)	1.30 (1.42)	0.45 (0.37)	0.65 (0.67)	0.80 (0.82)	2.20 (3.24)	1.45 (1.52)	0.40 (0.57)	2.35 (3.54)	0.45 (0.55)

() 内は標準偏差を示す。

表4 父親の遊び「経験群」と「未経験群」の生後1か月における一日の育児行動の平均回数

	n	抱く	寝かしつけ	入浴（沐浴）	授乳	げっぷ	おむつ（尿）	おむつ（便）	着替え	遊び	お守り
経験群	18	3.7 (3.21)	1.4 (1.56)	0.5 (0.32)	0.9 (1.63)	1.4 (1.73)	1.9 (2.78)	1.1 (1.60)	0.3 (0.38)	2.2 (2.88)	0.6 (0.97)
未経験群	7	3.1 (1.68)	1.2 (1.04)	0.4 (0.45)	0.4 (0.56)	0.9 (0.93)	2.2 (1.47)	2.1 (1.67)	0.4 (0.56)	2.3 (1.50)	0.6 (0.61)

() 内は標準偏差を示す。

(1.22) = 3.14, $p < .10$) であった。「遊び」では2か月より4か月の方が多くなり、「寝かしつけ」、「おむつ(便) 交換」では2か月より4か月の方が少なくなった。

4. 育児経験と育児行動の関連

図5と図6に父親と母親の育児経験について示した。「抱く」、「遊び」において、父親たちの半数以上が一度は経験したことがあると回答していたが、それ以外の項目についてはほとんどの父親が未経験と回答していた。一方、母親については、「抱く」、「遊び」において、9割が経験ありと回答していた。また、「入浴」以外の項目についても半数近くの母親が経験ありと回答していた。出産後の父親と母親の育児行動の違いが育児経験によるものであるとすれば、父親の中でも育児経験している父親と未経験の父親とでは、育児行動の初期値に違いが表れるのではないかと考える。そこで、経験ありの割合が高かった「抱く」、「遊び」の経験の有無によって、1か月の父親の育児行動に違

いが認められるか検討した。2項目についてそれぞれ経験群と未経験群に分け、1か月の育児行動の平均回数についてt検定を行った(表3, 4)。結果、1か月の育児行動について「抱く」、「遊び」とともに経験群と未経験群との間に有意な差は認められなかった。

IV. 考 察

1. 父親の育児行動の実態

父親の育児行動の中で「抱く」、「遊び」、「入浴(沐浴)」、「お守り」において、1か月より2か月および4か月の回数が増加した理由として以下が考えられる。一点は母子が母親の実家から帰宅したことで、父親と子どもの接触が可能になったことである。表1に示したように本研究の対象者25組のうち、「現在、お子さんと一緒に生活していますか」の問いに「はい」と回答した父親は、1か月の時点で12人(48%)、2か月では24人(96%)、4か月では25人(100%)であり、2か月以降ほぼ全員の父親が子どもと一緒に生活をしていた。「抱く」、「遊び」、「入浴(沐浴)」、「お守り」

の回数が増加した理由には、このような物理的な要因が影響していると考えられる。もう一点は、子どもにとって2か月から4か月が社会・認知能力が出現し、発達する時期であるという点である¹⁷⁾。子どもは2か月頃になると親の目を見るだけでなく、その顔に微笑するようになる。さらに4か月になるとますます笑う回数は増え、声を出して笑うようになる。運動機能面においては手で物をつかんだり、物を口の中に入れるようになる。「遊び」、「お守り」などの父親の育児行動の増加は、このような子どもの社会・認知能力の発達や、運動機能の発達による子どもとの関わりやすさが影響していると考えられる。菅原¹⁰⁾によると、子どもが1歳半の時点における父親の育児行動は、「入浴(沐浴)」、「遊び」といった比較的難易度の低いものが多いという。本研究結果は先行研究を支持すると同時に、父親が関わる育児行動は乳児期から幼児期にかけて、難易度の低いものが選択されやすい傾向にあることを示している。

一方、「寝かしつけ」、「おむつ(便)交換」の回数が減少していた理由について、この傾向は母親の育児行動の変化と類似していたことから、父親と母親に共通して子どもの生理的変化によるものと考えられる。睡眠については、一般的に生後1か月の乳児は1回の睡眠が1～2時間程度で昼夜の区別がなく、2か月までは4時間起きて4時間眠るというサイクルで生活する。そして、3～4か月頃になってようやく昼夜の区別がつき始め夜に眠れるようになる。したがって、子どもの月齢の進行にともない昼間の睡眠が少なくなることが「寝かしつけ」回数の減少に影響していると考えられる。「おむつ(便)の交換」回数については、1か月頃までは「胃直腸反射」(胃に食べ物が入るとその刺激が反射となって、直腸に伝わり排便を促すという仕組み)があるために、授乳の度に排便が起こることがあるが、2か月以降は排便の回数が減ってくる。したがって、おむつの交換回数も減少することになる。「授乳」、「げっぷ」、「おむつ(尿)交換」、「着替え」については3時点において、有意な変化は認められなかった。これらの育児行動は授乳時に一連の行為として行われるものである。今回調査に協力してくれた対象者のほとんどが母乳栄養であったことから、これらの項目は初期から母親の役割となっていると考えられる。

近年、父親の育児参加が増加してきていると言われ

ている¹⁸⁾。しかし、本研究から父親の育児行動の実態は、母親に比べてかなり少ないということ、「抱く」、「遊び」など父親にとって比較的容易な育児行動は月齢とともに回数は多くなり、「おむつ交換」、「寝かしつけ」などの項目では月齢とともに回数が減少することが実証的に示された。一方で、母親と比べ回数は少ないものの、父親が出産後極めて早期から一通りの育児を行っていることも事実である。本研究において対象者となった母親は、専業主婦17人(68%)、育児休暇中8人(32%)であったことから、母親よりも父親が子どもと関わる時間が少ないのは当然である。そのことを含めて父親の育児行動について考察すると、乳幼児期において父親は帰宅後と休日の比較的多くの時間を子どもと過ごしていると考えられるのではないだろうか。

2. 父親と母親の sensitivity の発達

sensitivity については、父親よりも母親の方が高く、母親は生後数か月の間に子どもの月齢にともない発達するが、父親においては短期間で発達しないことが示されたといえる。父親と母親の sensitivity の発達に違いが認められた点について、以下の理由が考えられる。一つは、父親と母親の sensitivity の初期値が異なるという可能性である。図5、6に示したように父親と母親の育児経験にはかなりの差が認められたことから、すでに母親の sensitivity は初期値が高く発達しやすい状況にあるのではないかと。一方、父親は一般的に初期値が低く sensitivity が発達しにくい状況にあるのではないだろうか。もう一つは、子どもと関わる時間が異なるという点である。父親の育児行動は1～4か月にかけて「抱く」、「遊び」といった項目で子どもの月齢にともない増加することが示されたが、その回数は母親に及ぶものではなかった。sensitivity が子どもとの関わりの中で発達するとすれば、子どもと接する量が多い母親の方が父親よりも sensitivity が発達しやすい状況であるといえる。父親は母親と比較して子どもと関わる時間がかなり少ないことから、父親の sensitivity が発達するには母親よりも長期間を要すると考えられる。

父親と母親の sensitivity が4か月において有意な正相関が認められた点については、2～4か月にかけて父親と母親は、子どもと関わる中で互いに影響し合っていることがうかがえる。一方、2か月の時点で相関

が認められなかったことについては、里帰りによって出産後から約1か月間は夫婦が別々に暮らしていることから影響しにくい状況であることが一つの要因となっていると推測される。子どもの発達には父親と母親の補完性が重要であり、2つのメカニズムは密接に関連し、父子間の遊びは母子愛着に依拠していると指摘されている¹⁹⁾。また、前述したように sensitivity 得点は父親よりも母親の方が高いことから、sensitivity について父親は母親の影響を受けていると考えられる。この結果は興味深い点であり、今後、父親と母親の sensitivity の因果関係を検討することが課題といえる。

3. 父親の sensitivity の発達と育児行動の関連

sensitivity 得点が上昇した父親は、変化がみられなかった父親よりも授乳や着替えを実施していることが示された。授乳は育児行動の中で比較的落ち着いた雰囲気で行われる。しかも授乳には一定の時間が必要である。その間、父親は子どもと密着し何かを語りかけながらミルクを与えているのかもしれない。結果として、そのような行為が sensitivity の上昇に影響していると考えられる。本研究の対象者は2か月の時点ではほぼ全員が母乳栄養と回答していたにもかかわらず授乳している父親がいることの整合性については、次のことが考えられる。一般に母乳栄養が完全に確立されている割合は、3か月の時点で4割程度であり、母親たちの多くは子どもに母乳を与えた後にミルクを追加する²⁰⁾。その一番の理由は、「母乳不足が不安である」ことであり、おそらくこの傾向は初産婦に多いと考えられる。本研究の対象者は全員初産婦であることから、母乳不足を不安に感じてミルクを足しているケースが多いことが予測される。おそらく sensitivity が上昇した父親は、母親が母乳を終えた後で子どもにミルクを与えているのであろう。母親にとって3～4時間おきに実施する授乳が、父親にとっては親であることを実感できる貴重な時間なのかもしれない。着替えについては、月齢の若い乳児は消化器官が未熟であるために生理的な嘔吐が多く、授乳のたびに嘔吐をすることも少なくない。授乳後に子どもが嘔吐して肌着が汚れた場合、授乳からの自然な流れで父親が着替えをすることもあろう。着替えの回数が増えればより上昇群の方が多かったのは、授乳の回数に影響を受けていると考えられる。本研究結果は、sensitivity の発達

に授乳や着替えといった育児行動が効果的な役割を持つこと、また sensitivity の高さが学習によって成り立つことを示唆するものであり、父親も母親と同じように経験を通して親としての適応的な行動がとれるようになることの可能性が示されたといえる。

4. 育児経験と育児行動の関連

育児経験については、「抱く」、「遊び」といった行為は、子どものいない男性にとって比較的容易に経験できる項目といえるだろう。その一方、半数近くの父親がこれまで子どもと接したことがないと回答していた。母親の育児経験については「抱く」、「遊び」について9割が経験ありと回答していたことから、女性の方が男性より子どもと関わる機会が多いことがうかがわれる。この結果は、出産後の父親と母親の育児行動の違いが、すでに妊娠期以前から始まっていることを示している。

育児経験と育児行動の関連については、父親の「抱く」、「遊び」といった経験によって、出産後の育児行動に違いがないことが示された。しかし、この点についてはいくつかの理由が考えられる。まず一点目は、「抱く」、「遊び」以外の父親の育児行動の中に出産後の育児に有効な育児があるという考えである。図5を見ると、「抱く」、「遊び」以外の項目で若干名の父親が経験していると回答していた。これらの父親は出産後の育児においても高い頻度で実施している可能性がある。二点目は出産後の父親の育児に影響を与える経験の閾値の違いである。つまり、ある一定量の育児経験が出産後の育児に影響を持つという推測である。そして、三点目は育児経験の時期によって異なる可能性がある点である。本研究では育児経験の時期について、いつからいつまでの育児経験をたずねているのか質問紙の中で明確にしていなかったことから、妻の妊娠中と妊娠前の育児経験が混在している。父親の幼少期における自身の年下のきょうだいへの世話などという時期的にかなり以前の経験も含む可能性もある。したがって、これらの結果から出産後の育児行動への育児経験の影響を言及することには限界がある。今後どの時期の育児経験が、出産後の育児行動に有効となるかについて検討する必要があるといえる。

V. 結 論

本研究では、従来の母親の発達に関する研究の知見

と方法を父親に適用しようと試みた。まず父親の育児行動については、子どもの月齢に応じて回数が増えるものと減るものがあることが示された。そして、その変化は子どもの発達の影響を受けることが示唆された。これらの結果から、1～4か月という子どもの月齢の早い時期に父親たちが行動レベルで変化することが実証的に明らかにされたといえる。

父親の sensitivity の発達については、全般的には短期間で発達しにくいことが示された。ただし、父親の場合、母親に比べ個人差は大きく sensitivity 得点が上昇した父親もあり、彼らの特徴は授乳や着替えをしていることであった。この結果は父親の sensitivity が子どもと関わる時間の量と関連することの可能性を示唆している。従来、母乳栄養が推奨されてきた理由には、医学的な利点以外に母子相互作用の促進があった。つまり、授乳時、子どもと目を合わせる、高い調子で話しかけるといった母親からの刺激によって、新生児は微笑みや喃語で反応するようになり、母親はいっそう子どもに対して愛情を深めていくというのである²¹⁾。この理論を父親に適用すると、父親が行う授乳には母乳のような直接的な皮膚の接触はないが、目を合わせたり話しかけるなどの刺激によって、子どもが微笑み、それによって父親も愛情を深めると考えられる。授乳という行為は母親だけでなく父親の発達にとっても重要な意味を持つようである。母親は出産後に突如として母親としての行動がとれるのではなく、子どもとの関わりを通して発達することが知られている⁸⁾。本研究によって父親も発達する存在であること、その発達には母親や子どもの発達に関連していることが示唆されたことは父親研究において新たな知見といえるであろう。特に男性の生活実態に即して父親の発達が問われることは少なかったことから、父親の発達をひも解く貴重なデータと考える。

VI. 今後の課題

本研究では、妊娠期、生後1か月、2か月、4か月を対象時期としたが、sensitivity の発達において、父親が母親のように習熟するには時間を要することが推測されることから、今後は、幼児期まで長期的な視点で捉える必要がある。さらに、母親に比べて父親は育児行動の個人差が大きいことがうかがえたことから、対象数を増やしてその詳細を明らかにする必要があるだろう。

謝 辞

調査にご協力いただきました各施設の皆様とお父様方・お母様方に心よりお礼申し上げます。本研究は、平成2008～2009年度科学研究費補助金：若手研究B（課題番号20791738）の助成を受けて行ったものであり、一部を日本発達心理学会第21回大会にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E, et al. Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, N. J: Lawrence Erlbaum Associates, 1978.
- 2) 小山里織. マターナル・アタッチメントと母親の養育行動および1歳児のアタッチメント行動との関連. 小児保健研究 2008; 67: 565-572.
- 3) Farver AM, Wimbari S. Paternal participation in toddlers' pretend play. Social Development 1995; 4: 17-31.
- 4) 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カツコ, 他. 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究 2002; 13: 30-41.
- 5) 菅原ますみ. 父親の子育てと子どもの発達 生後11年間の追跡研究から. チャイルドヘルス 1999; 10: 735-739.
- 6) Tomasello M, Conti-Ramsden G, Ewert, B. Young Children's Conversation with their Mothers and Fathers: Differences in Breakdown and Repair. J Child Language 1990; 17: 115-130.
- 7) Yogman MW. Observations on the father-infant relationship. Cath SH, Gurwitt AR, Ross JM, eds. Father and Child: Developmental and clinical perspectives. Hillsdale: Tee Analytic Press, 1994: 101-122.
- 8) 服部律子. 0～2歳児の父親の家事育児行動と母親の健康との関連. 母性衛生 2002; 1: 43-50.
- 9) 小林佐知子. 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連. 発達心理学研究 2009; 20: 189-197.
- 10) 菅原ますみ. 父親の育児行動と夫婦関係, そして子どもの精神的健康との関連—生後11年間の追跡調査から—. 教育と情報 1998; 483: 7-12.

- 11) 橘 千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 他. 夫の家事育児行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連: 妻との比較. 母性衛生 2008; 49: 65-73.
- 12) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006; 17: 182-192.
- 13) 大野祥子. 育児期男性にとっての家庭関与の意味: 男性の生活スタイルの多様化に注目して. 発達心理学研究 2012; 23: 287-297.
- 14) 大日向雅美. 母性の研究. 第1版. 東京: 川島書店, 1988.
- 15) 二宮恒夫, 出口洋江, 尾方美智子. 父親の育児に関する学習の場への参加と母乳継続との関連に関する検討. 小児保健研究 1997; 56: 49-53.
- 16) Biringen Z, Robinson JL, Emde RN. Emotional Availability Scale. Unpublished manuscript, University of Colorado Health Sciences Center, 1998.
- 17) 平嶋慶子. 乳児期の特色. 山内光哉編. 発達心理学. 第2版. 東京: ナカニシヤ出版, 2007: 32-37.
- 18) 厚生労働省. 「平成23年度雇用均等基本調査」の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-23r-08.pdf>. 2013.7.25.
- 19) Paquette D. Theorizing the Father-Child Relationship: Mechanisms and Developmental outcomes. Human Development 2004; 47: 193-219.
- 20) 石井美里. 生後3ヶ月までにおける母乳栄養確立状況の調査. 東海大学健康科学部紀要 2002; 8: 31-36.

- 21) Klaus MH, Kennell JH. Maternal-Infant Bonding. St. Louis: C. V. Mosby Company 1976. (竹内 徹, 柏木哲夫訳. 母と子のきずな. 東京: 医学書院, 1979)

[Summary]

The purpose of this study was to examine the relationship between sensitivity development and child-care behavior in couples expecting their first child. A questionnaire survey was conducted on 62 first-time expectant couples during the late stages of pregnancy and at one, two, and four months postpartum. Two recognizable patterns were seen in which the child-care behavior of fathers became more or less frequent with increasing age of the infants. Furthermore, during the period between two and four months postpartum, mothers demonstrated more sensitivity than fathers. The sensitivity of mothers was shown to increase with increasing age of the infants, whereas no increase was observed in the sensitivity of fathers. Finally, a small number of fathers whose sensitivity increased with increasing age of the infants tended to more frequently exhibit child-care behavior such as bottle-feeding and changing their infants' clothes. These findings suggest the possibility that the sensitivity of fathers is related to the frequency of child-care behavior.

[Key words]

father, child-care behavior, sensitivity